

最近、山に登ってみたいと思ふことがある。この年になって山登りは大変だと思ふが、なぜか遠くに見える山を見ながら、あの山の頂に立ったなら、どんな景色が見えるのだろうかと考えたりする。きつと途中で疲れて登れないかもしれないが、登った人だけが見ることのできる「パノラマが広がっているのだろうかなあ」などと、その気持ちの良さを想像している。里親の子育ても一歩ずつで、山登りと同じかもしれない。

私たち夫婦の元にある時、1人の男の子が里子としてやって来た。生まれた時から親に育てられたことがなく、虐待を受けていた子だった。学校では団体行動ができず、毎日のように担任から連絡が来た。家でも頑固で融通が利かず、うそを言い、寡黙だった。私も妻も対応に困ることが多かった。それでも、生活を続けていくうちに少しずつ、年を追ってその子の様

子が変わっていった。そんなある日、妻が風邪をひいて高熱を出した。食事も喉を通らず、冷たいスイーツが食べたいと言ったが、都合があり私は買いに行くことができなかつた。

た。そして本当にうれしかった。その後、その子は学校での問題行動が徐々に減っていき、無事に学校生活を終えた。現在は社会人となつて1人暮らしをしている。

また、子どもを見て、里親の方から委託を断る場合もある。子どもには、変わらなない養育者との安定した関係が必要と言われているが、里親への委託は簡単に進まない。

要とする子どもたちの「育てにくさ」に関する学びだ。子どもを委託されてから、この育てにくさに悩む里親は多い。そして少数ではあるが、委託を取り消すことに至る里親もいる。

# 冷蔵庫の中の小さな器



はたけやま  
**畠山 憲夫**  
のりお



しかしその夜、冷蔵庫を開けると、奥の隅の方に小さな器があつて、形の崩れた牛乳が固まつたようなものが入っていた。私は誰かが食べ残し、古くなつたものだと思つたが、実は妻のために、その子が本を見ながら作ってくれたプリンだと分かつた。その時、私も妻も口数の少ないその子を、心からいとおしいと思つ

栃木県では、施設や里親の元で育つ「社会的養護」を必要とする子どもたちの多くが施設で暮らしている。里親家庭で暮らす子どもの割合は全体の約2割だ。その理由はいろいろあるが、里親が育てるには難しい子どもが増えていることや、実親が施設入所には同意しても里親には同意をしないということがある。

里親の研修の中で「愛着障害」とか「試し行動」といったことを学ぶ。これは要するに、社会的養護を必

とちぎ家庭養育推進協議会代表理事。フリーの映像ディレクターとして28年間、テレビ番組を制作。2005年に日光市での児童虐待防止のNPO法人立ち上げに参加し、里親となる。10年にファミリーホーム「虹の家」を設立。21年より現職。奥里親連合会会長。東京都出身。同市在住。68歳。